

第4章 総括

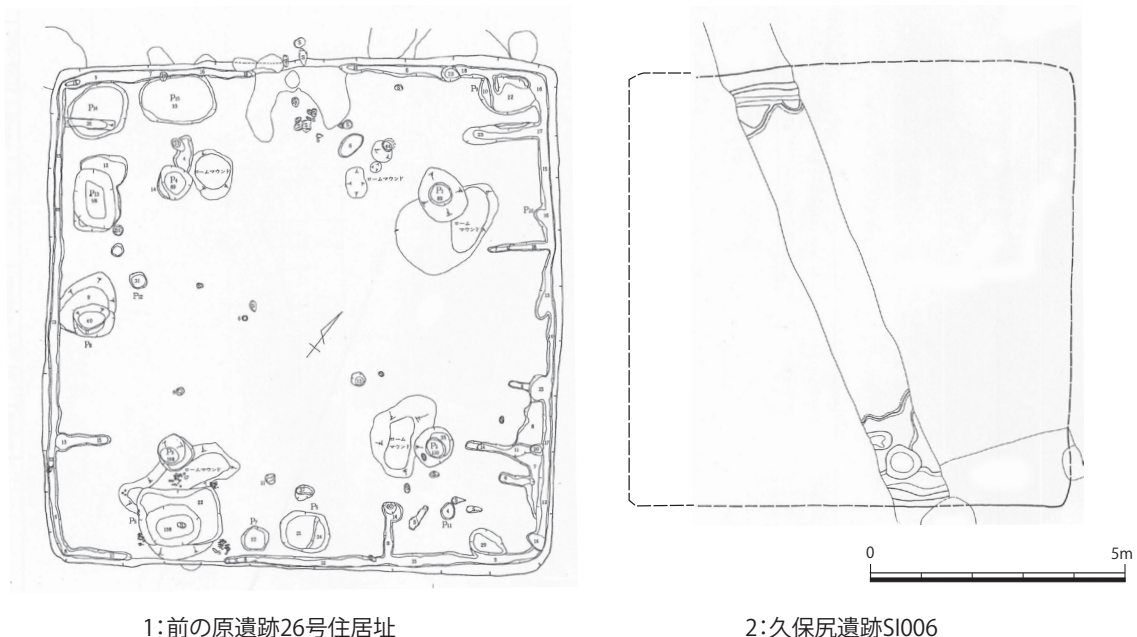
今次調査では古墳時代の大型竪穴建物や奈良時代の竪穴建物群など、大きな成果が得られた。本章では調査成果をまとめ、今後の課題と展望を提示したい。

第1節 古墳時代の竪穴建物 SI006 について

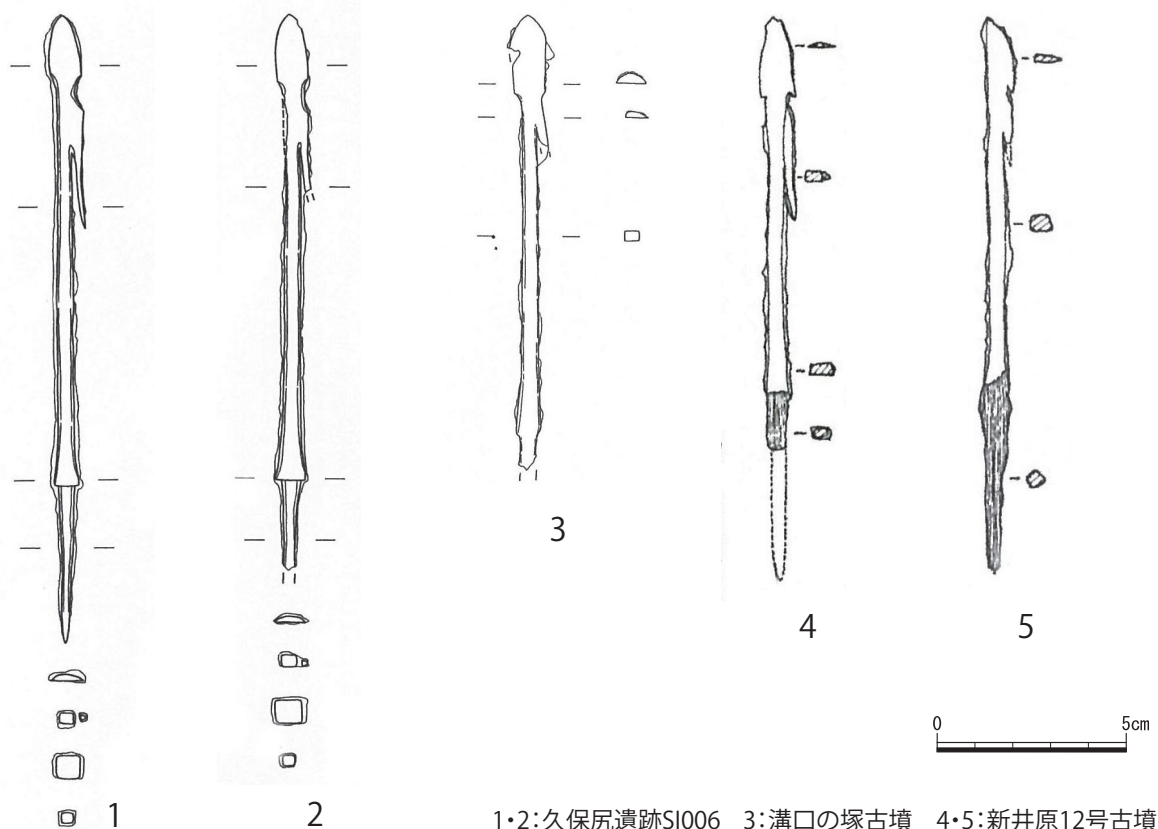
今次調査で確認された古墳時代中期の竪穴建物である。全体からするとごく一部の調査にとどまったが、床上から遺物が多数出土した。また、建物の床および壁には被熱した痕跡が認められ、床付近の埋土中から多量の炭化材が検出された。

構造と類例 当建物は方形に復元した場合の規模が1辺8.4 m程度と推定され、古墳時代の竪穴建物としては大型の部類に入る。また、鉄器及び砥石、土師器の杯が卓越する。同時期でこの規模・構造に近い竪穴建物として、前の原遺跡26号住居址がある(第22図)。当該建物は昭和63(1988)年度に竜丘保育園建設に先立つ調査で確認されたもので、建物全体が調査された。一辺11.4 mの方形を呈し、北壁にカマドを1基そなえつけ、間仕切りをもつ。SI006と同様に土師器杯が多く出土しており、当建物と同時期に比定される。前の原26号住居址は今次調査区から700 m程南の地点にあり、同時期に2つの大型建物が桐林地区に併存していたこととなる。このような中期の大型竪穴建物に注目した西山克己は、導入期のカマドと間仕切りをそなえることを特徴としたうえで、県内における類例は伊那谷と善光寺平周辺に限られるとし、積極的に外来文化を摂取した新興在地勢力の存在を読み取る(西山2002)。カマドや間仕切りの有無は不明だが、規模や出土遺物からして、SI006もこれらに類する竪穴建物といえる。

出土遺物 当建物で注目すべきは、武器である鉄鏃、工具の鉄鉈、砥石が多数出土したことである。このうち長頸鏃(12・13)は2点とも別造りの片腸挟をもち、「逆刺独立三角・柳葉形鉄鏃」(関1991)、「独立片逆刺長頸鏃」(鈴木2003)とも呼ばれる。鏃身関はナデ関で、腸挟が非常に細く



第22図 竜丘地区の古墳時代大型竪穴建物



第23図 飯田市出土の別造り片腸挟をもつ長頸鎌

造り出されていること、全長が 16cm 以上に及ぶことから、この種の長頸鎌の中でも古相の特徴を示す。鈴木一有はこの鎌について、鉄製甲冑との共伴率が高いことから、畿内王権との強い政治的紐帯を表す特殊な矢鎌と位置付ける。飯田市内では、座光寺地区の新井原 12 号古墳（帆立貝形古墳）、上郷地区の溝口の塚古墳（前方後円墳）から出土している（第 23 図）。前者は鎌束で複数、後者は 1 点のみであり、保有形態は異なるものの、双方とも竪穴式石室を主体部にもつ上位の首長墓である。また、いずれも短甲と共伴することから、飯田市域の各勢力と畿内王権との密接な関係を示す遺物といえる。久保尻遺跡および溝口の塚古墳出土例はナデ関で、新井原 12 号古墳出土例は鎌身が三角形のものと片刃の鎌身に片腸挟がつく特殊な個体がそれぞれ報告されている。久保尻遺跡例は新井原 12 号古墳例よりも古相に位置づけられる要素を具えるが、大きく製作時期が異なるとは考えられない。なお、平根鎌も二重の腸挟をもつもの（15）、鎌身中央部に 2 孔が穿たれるもの（16）があり、特殊性が認められる。

古墳時代の竪穴建物から鉄鎌が出土する事例は列島各地で散見される。関東の竪穴建物出土鉄鎌を集成した箕浦絢によれば、別造り片腸挟の長頸鎌が竪穴建物から出土した事例は非常に少ない⁽¹⁾。また、集落出土鎌において、建物の一部の調査にも関わらず、5 点もの鎌が建物 1 棟から一括で得られること、5 世紀代の建物から長頸鎌と平根鎌が同時に出土することも稀な現象といえる（箕浦 2019）。このように当建物の鉄鎌は、出土数や型式においても特別な位置づけがされるべきものといえる。これらは束ねられることなく床上に 1 点ずつ散在しており、建物廃絶に伴い儀礼的な廃棄が行われた可能性がある。焼失家屋である点も考慮すべきであろう。

建物の時期と性格 長頸鎌の年代は、水野敏典による中期鉄鎌編年（水野 2003）の中期三段階、川畑純による前・中期鉄鎌編年（川畑 2009）のⅣ期古段階にあたる。共伴した土師器類の編年（山

下 1999) から見ても乖離はなく、建物の廃絶時期は古墳時代中期中葉である。当建物は通有の竪穴建物と比べて明らかに大型であり、一般的な住宅とは性格を異にする。加えて、別造りの片脇挟をもつ長頸竈をはじめとする鉄器類が多数出土したことから、畿内と関係を有する首長あるいは集団の存在が推察される。当地点から新川を挟んで 700 m ほどの地点には、中期の前方後円墳とされる権現堂 1 号古墳がある。また、南に 1 km ほどの位置には同じく中期の兼清塚古墳、丸山古墳、大塚古墳の 3 基の前方後円墳が集中する。SI006 が所在する久保尻遺跡は、これらの古墳の母体となった集団の居住域のひとつと考えられ、前の原遺跡と並行する中期の集落に数えられる。以上のように SI006 は、飯田と畿内王権との関係を考えるうえで重要な遺構であると同時に、桐林・駄科の古墳時代勢力の展開をみるうえでも看過できない。

第2節 焼成坑 SK004 について

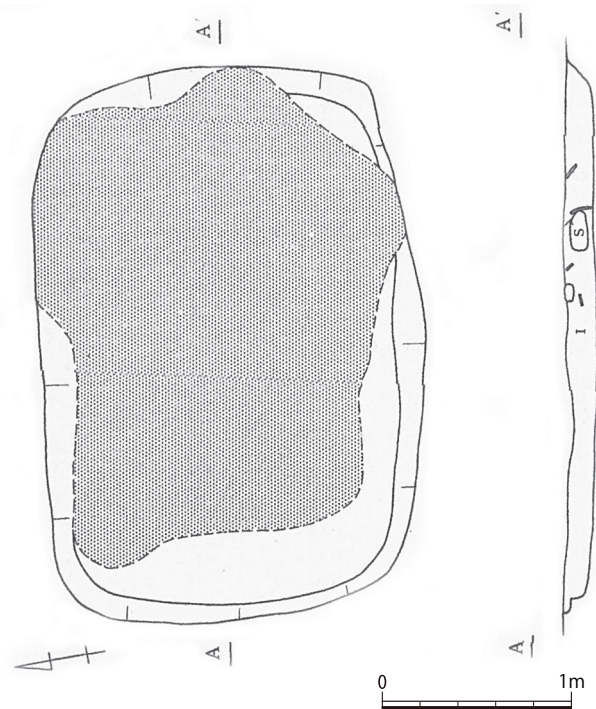
本遺構は不整四角形を呈する土坑で、何らかの焼成行為を行った「焼成坑」である。

焼成坑の性格として、「土師器焼成坑」と「製炭土坑」があることが知られている。各地の事例をもとに土師器焼成坑を定義した木立雅朗は、土師器焼成坑の必要条件として以下の 3 点を挙げている（木立 1997）。

- ① 掘り込んだだけの単純な土坑であること（それ以外の固定的な施設をもたない）
- ② 土坑床面が赤色に焼けていること（壁面のみが赤色に焼けたものは除外する）
- ③ 炭・灰・赤色焼土の塊～粒が原位置で確認され、その土坑で直接火を使ったことが明確であること（2 次堆積のものは除外する）

報告中で述べたように、SK004 は、①、②、③の条件すべてを満たすといえる。したがって、本遺構の性格は「土師器焼成坑」と評価できる。望月精司による分類の A 類（平面方形・長方形・逆三角形に構築され、奥壁・側壁を中心に被熱が広がる）に該当し、A 類のなかではⅡ類（縦長指向かつ逆台形に近いもの）にあたる（望月 1997）。県下における焼成坑をまとめた山田真一によると、松本市や長野市などで比較的多く確認されているものの、南信地域ではこれまでに報告例がなく（山田 1997）、貴重な事例である。

県内の事例をみると、平安時代とされる松本市の宮の前遺跡の類例（第 24 図）が近い特徴を有する。長方形を呈し、縦軸長は 296 cm を測り、SK004 と比べてかなり大型であるが、被熱の広がり方は類似する。当遺跡の SK004 では焼成されたと考えられる遺物が出土しなかったため直接的な時期比定は困難だが、本調査区域が奈良時代集落域であることや、望月 A 類の焼成坑が主として古代に用いられたことから、奈良時代の土師器焼成坑の蓋然性は高いと考える。古代の土師器甕については、中信と南信で細部の技法に違いが指摘されている（直井 1996 ほか）。本遺構は、このような土器の地域性や生産体制を考察するうえで、基礎的な資料になりうる。今後の実態解明に期待したい。



第 24 図 松本市宮の前遺跡 土師器焼成坑

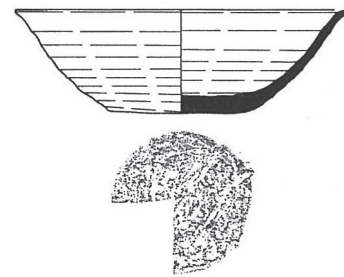
第3節 奈良時代集落とその性格について

奈良時代の竪穴建物が3棟確認された。今次調査で確認された集落は、恒川編年において古代3期から4期に該当し、奈良時代中葉～後葉（8世紀中頃～後半）に比定される。座光寺の伊那郡衙周辺を除くと、上郷地区の堂垣外遺跡、松尾地区の田圃遺跡、妙前遺跡などで奈良時代の集落が確認されているが、竜丘地区での集落跡は安宅遺跡や小池遺跡などの調査例があるのみで、久保尻遺跡における奈良時代集落の発見は多くの示唆に富む。

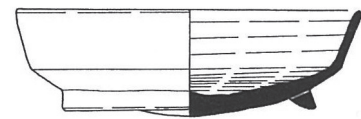
各建物から出土した土器類は、須恵器を主体とすることに特徴がある。特に食器については、土師器はまったくみられず、須恵器のみで構成される。この須恵器主体の土器組成は、当地域の奈良時代後期から平安時代初期の特徴とされる（小平2003ほか）。須恵器の供給元が問題となるが、当遺跡に隣接する須恵器窯として、宮洞窯跡群が有力な候補となる。宮洞窯跡群は竜丘地区を流れる駒沢川上流の山間地に開かれた登り窯で、このうち本格的な発掘調査がされたのは1号窯と3号窯である。3号窯は当地方で最初期の須恵器生産を担った窯とされ（遮那1987）、操業は8世紀中葉とみられている。1号窯はそれに続く8世紀末～9世紀初頭とされる。

今次調査でSI005から出土した盤（21）は律令期に登場する特徴的な器種で、宮洞3号窯で比較的多くの製品が報告されている。飯田市上郷考古博物館所蔵の当窯出土資料を実見したところ、個体ごとに形態差が大きく、製作技法や器高・器径、胎土等がSI005の盤と一致する製品は認められなかった。ただし、本例と同様に焼成が甘くきわめて軟質な一群は窯資料中に認められたことから、奈良時代に操業した竜丘の古代窯群のいずれかで生産された可能性は高いと考える。今回は窯出土資料について悉皆的な分析を行ったわけではなく、推察の域を出ないが、窯に近接する久保尻遺跡の奈良時代集落では宮洞窯で生産された須恵器が直接搬入され、使用されていたとみられる。これらの生焼け傾向の一群に対し、SI007カマド内出土の無台杯および有台杯（第25図）は焼き上がりが良く硬質で、胎土中に礫や砂粒がきわめて少ない。宮洞3号窯の資料中には同様の製品はまったく認められないため、これらはおそらく地域外からの搬入品であろう。奈良時代は伊那郡下において須恵器在地生産の開始段階であり、在地品と搬入品が混在する状況が改めて確認できた。天竜川対岸の龍江地区で上の城窯、荻の平窯など多くの須恵器窯が操業を開始し、郡内の自給体制が整うのは、平安時代初期とされる（山下2019）。

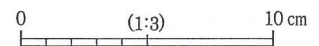
以上のように、当遺跡における奈良時代集落は、宮洞窯の操業時期にほぼ並行すると考えられる。竜丘地域では、駄科の安宅遺跡で規格性のある掘立柱建物群と杭列が確認されており、律令期に地域拠点的な役割を担っていたとみられる。当遺跡は安宅遺跡と新川を挟んだ対岸に位置し、宮洞窯から直線距離で1 kmほどの近場にある。高台に造営された古代寺院の前林廃寺に近接することも興味深い。この立地環境は、当遺跡が須恵器窯や古代寺院と密接に関係しつつ、拠点的な集落として発展した可能性を示唆する。さらなる検討を要するが、当遺跡の奈良時代集落は、律令制下における伊那郡の地域内支配や生産・分業体制を考察するうえで参照されるべき事例である。



SI007 (No.28)



SI007 (No.29)



第25図 搬入品とみられる須恵器

第4節 まとめと展望

今次調査では、古墳時代の大型建物、奈良時代の集落、土師器焼成坑の確認が大きな成果として挙げられる。古墳時代中期の大型建物が存在し、奈良時代にも集落が発展することは、竜丘という一地域の性格や動向を考えるうえで貴重な成果となった。古墳時代にヤマト王朝との強固な関係をもって駄科・桐林に成立・展開した竜丘の首長層は奈良時代までに結集し、ひとつの地域的な勢力として伊那郡衙の傘下に入り、古代寺院を擁することとなったのではないだろうか。このような背景から、古墳時代に集落が発達し、奈良時代にも須恵器窯や古代寺院に隣接する久保尻地籍に集落が継続して営まれたと推察する。

なお、多くは触れられなかったが、中世遺構の存在から、当該時期には屋敷地であった可能性があり、鈴岡城に展開した小笠原氏との関わりも含め、今後の課題としたい。

最後に、調査にあたり多大なるご理解とご協力をいただいたみなみ信州農業協同組合様、並びに調査や整理作業の実施にあたってご指導くださった皆様方に深く感謝申し上げます。

註

(1) 箕浦氏より、松本市山影遺跡（松本市教育委員会 1993）より別造り片腸挟をもつ長頸鏝 1 点が出土していることをご教示いただいた。よって、管見による限り、当遺跡は県内で同種の鏝が竪穴建物から出土した 2 例目となる。また、関東では栃木県宇都宮市砂田遺跡（とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002）で 1 点が出土しているが、ほかに確実な報告例は知られていないとのことである。

引用・参考文献

- 伊藤 尚志 2005 「第Ⅱ章 古代の土器」『恒川遺跡群—遺物編その1（古代・中世）—』、飯田市教育委員会
- 川畑 純 2009 「前・中期古墳副葬鏝の変遷とその意義」『史林』92-2
- 木立 雅朗 1997 「土師器焼成坑の定義と型式分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 小平 和夫 2003 「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55巻第2号
- 遮那 藤麻呂 1987 「伊那谷南部在地生産須恵器の実態」『長野県考古学会誌』55・56号
- 杉井 健 1999 「甗形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 鈴木 一有 2003 「古墳中期における副葬鏝の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
- 関 義則 1991 「逆刺独立三角・柳葉形鉄鏝の消長とその意義」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集—』、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤澤 良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10
- 直井 雅尚 1996 「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

- 西山 克己 2002 「下伊那の古墳群形成と伊那郡衙の成立」『長野県の考古学Ⅱ』 長野県埋蔵文化財センター
- 水野 敏典 2003 「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『榎原考古学研究所論集』第14 奈良県立榎原考古学研究所
- 箕浦 絢 2019 「古墳時代関東における集落竪穴建物跡出土鉄鏃の分布と組成」『考古学集刊』第15号、明治大学考古学研究室
- 望月 精司 1997 「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 山下 誠一 1999 「(4) 南信地域の様相」「長野県における古墳時代中期の土器様相―屈曲脚高杯の出現から消滅までの予察―」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 山下 誠一 2004 「飯田盆地における古墳時代後期集落の動向―発掘された竪穴住居址を基にして―」『飯田市美術博物館紀要』第14号
- 山下 誠一 2019 「第Ⅳ章 まとめ」『上の城窯跡 萩の平窯跡 龍江狐塚遺跡』飯田市教育委員会
- 山田 真一 1997 「甲信」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会

報告書等

- 飯田市教育委員会 1968 『内山、花の木発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1975 『前の原・塚原』
- 飯田市教育委員会 1990 『前の原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996 『久保尻遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998 『内山遺跡』
- 飯田市教育委員会 2001 『溝口の塚古墳』
- 飯田市教育委員会 2002 『前の原遺跡 IV』
- 飯田市教育委員会 2019 『上の城窯跡 萩の平窯跡 龍江狐塚遺跡』
- 今村 善興・小林 正春 1987 「新井原12号古墳」『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会
- 松本市教育委員会 1982 『松本市宮の前遺跡』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市山影遺跡緊急発掘調査報告書』
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002 『東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)』 栃木県埋蔵文化財調査報告第256集

挿図出典

- 第22図 飯田市教委 1990 および本報告書掲載図面をもとに作成
- 第23図 今村・小林 1983、飯田市教委 2001 および本報告書掲載図面をもとに作成
- 第24図 松本市教委 1982 をもとに作成
- 第25図 本報告書掲載図面をもとに作成